

## 小野蘭山

古来より人類は生命を維持し健康を保つため、様々な植物や動物、鉱物を活用してきた。本草学はそれらの産地や形態、薬効などを研究する学問として紀元前の中国で発生した。

本誌2017年4月号の本欄で紹介した平賀源内(1728～1779年)と同世代の本草学者(薬用植物学者)に小野蘭山(1729～1810年)がいる<sup>1)</sup>。源内が、他方面に渡る才能を持ちつつも“山師”扱いされた動に対し、蘭山は、植物採取以外は外出せず、庭に珍草異木を植え、春秋には塾生と山野で採薬した静の人である<sup>2)</sup>。

利益や名誉のために本草学を修めることを嫌った蘭山は、真摯に学問に取り込もうとしない人間に多年研鑽を積んだ学問成果を教える必要があるかどうかを重視した。蘭山の書に「方可恃者薬也(方の恃べきは薬也)」の箴言は、医師が拠りべきは処方であり、処方の恃(たの)むべきは薬であると蘭山の理念の一端を書幅に垣間見ることができる。漢方医学がその本草を自在に操作することにより薬効を引き出す医術であったのならば、本草は医術の基礎を支えたとも言える<sup>3)</sup>。

1801(享和元)年から1805(文化2)年までに6回、関東を中心に14か国を廻る採薬記が残る。「採薬」とは一般的には山野に入って薬用植物を採取することであるが、本草学における採薬は植物採取だけでなく、動物や鉱物なども含めた自然産物を実地で観察・調査することでもあった。現代でも新規の抗生物質を産生する微生物の採取やその他の薬剤の候補となる自然界の学術的調査が行われ、くすりハンターと呼ばれるプロフェッショナルが世界中で活躍しているが、江戸時代に小野蘭山はまさに江戸のくすりハンターであった<sup>2)</sup>。

1803(享和3)年、75歳の時に研究をまとめた著書『本草綱目啓蒙』を脱稿した。本草1,882種を書き表す大著で3年の歳月をかけて全48巻が刊行され、この著書はのちにシーボルト(1846～1911年)が手に入れ、蘭山を「日本のリンネ」と賞賛している<sup>3)</sup>。

蘭山は、1799年以降10年間、幕命により江戸・医学館で講義した。1810年に江戸で死去し、墓は浅草・誓願寺・迎接院(こうじょういん)にあったが、関東大震災に遭い、堂宇、墓地の移転により、現在は、豊島園近くの迎接院墓域に移されている(写真1)。2010年、小野蘭山没後200年記念事業会により、京



写真1 小野蘭山の墓(東京都練馬区迎接院墓地)



写真2 小野蘭山顕頌碑(京都府立植物園)

都府立植物園内に「小野蘭山顕頌碑」が建立されている(写真2)。

蘭山のロマンチックな一面として、螢にからむエピソードがある。螢という夏の風物詩は、既に「日本書紀」から述べられていて「螢」、「保多留」などと書かれ、語源については諸説ある。貝原益軒(1630～1714年)は火が垂る(垂れる、流れる、こぼれ落ちる)から「火垂る」という説を唱えたのに対し、蘭山は星が垂るから「星垂る」としている。火か星か、いずれにしても感性の問題であろう<sup>4)</sup>。

### 参考資料

- 1) 諸澄邦彦, 平賀源内, *Isotope News*, **750**, 45 (2017)
- 2) 内藤記念くすり博物館, 江戸のくすりハンター小野蘭山, 内藤記念くすり博物館 (2012)
- 3) 杉本つとむ, 江戸の博物学者たち, 講談社学術文庫 (2006)
- 4) 鈴木 昶, 日本医科列伝, 134-135, 大修館書店 (2013)

(日本診療放射線技師会 諸澄 邦彦)